

土木計画学の フレーミングを考える

ワンデイセミナー100回記念シンポジウム
2020.4.1@土木学会講堂

早稲田大学 佐々木邦明

50周年シンポジウム

理論に基づく実践，現場に根差した理論

「迎る」「語らう」「描く」
理論—実践の両輪を目指して

第1回土木計画学シンポジウム(1967)

土木計画の在り方と基礎理念

土木計画と公共投資

加納治郎先生(経済企画庁総合計画局長)

- 土木技術に関する計画の**科学性**を高め、その基礎の上に立った**計画の方法を改善**していくことが重要
- 主体・対象・目的・手段**の静態的要素+**構成**(立案、決定実施の動態的要素)
- 公共投資や建設投資の中にとらえられる**土木の計画**は、経済分析の対象となり、経済政策の一部として学問的には**国民経済学の重要な部分**を占めることになる
- 国民経済学だけでなく、**政治学**や**社会学**の中に重要なかわりを持つ。
- 土木計画の個々のプロジェクトに立ち入ると、**自然科学**や**工学の広範な分野**が拓けることも自明

土木計画手法への反省

五十嵐日出夫先生(北海道大学)

- 正しい土木計画と手法
 - 正邪の判断は動機，目的，手法，結果の総合的観点より見るべき
 - 宗教・軍事・経済が社会的な目的に位置付けられてきた
 - 国民の福祉がこれからは目的となる。その考えからは土木計画手法への態度に反省すべき点がある
 - 目的の認識**：土木技術者が**計画目的を認識しないこと**、特に計画の任にあたるものは計画目的の正しい認識を把握することが任務である。
 - 目的と手法の錯誤**：思想を盾とし、**学術を矛とする**土木計画学者は「手法」を熱烈に愛するあまり「目的」と手法を取り違えてはいけない。
 - 土木計画手法の固陋(ころう)性**：慣れた数学的・物理的「手法」にだけ偏執し、**慣れない「手法」**に毛嫌いするならば、到底鋭利有力な土木計画手法の開発は及びもよらないことになる
 - 正しい土木計画についてその手法を示そうとするものは、旧弊な土木技術信奉者から破門されるかもしれない。

起終点施設計画と土木計画

長尾義三先生(京都大学)

- 美への憧憬と幸福の追求。これが個人の生命力であると**同様、社会それ自体も美しい環境と公共の福祉**を限りなく生み出そうとする
- 多数人の理想が**止揚**されたものとして結実していく。
- 隣人を結ぶ橋、困難をうがつつトンネル、暴力を防ぐ防波堤そして未来に築立つ飛行場は、こうした国民大多数の願いを込めて作られてゆく。その設計図。それが土木計画の基礎理念であり考え方の出発点であろう
- 土木計画学を生む必要条件
 - 社会**というもう一つの次元の生命体からその必要が要請されていることの認識。
 - その創造が、何の**動機**で、何を**目的**になされるかをはっきり把握すること
 - 願望と行為が**合目的**であり、なされた努力と果し得た結果が**社会の生命力の所産**として**価値あるもの**と判じ得る

誕生10周年を迎えた土木計画学(1976)

土木計画学原論を中心として

http://www.jsce.or.jp/committee/ip/50years/IP_Sympo_10_1976.pdf

計画システムと社会システム

吉川和広先生(京都大学)

- まえがき
 - 計画の定義に共通して強調されていることは、計画を**人間の意志の問題**としてとらえること
 - 土木計画の策定過程は、計画当事者による種の「**見通し**」と「**価値判断**」により導かれる
 - 土木計画は計画の立案にあたって**論理の構成を図る**と同時に、**倫理の実践**をも企てなければならない
 - **土木計画の底流**は、論理的整合性を要件とする**計画の科学化**と、**実践を通してその構成を反省する計画哲学**からなっていると考えることができる

土木計画論の構成とシステム記述

永井先生(建設省)・五十嵐先生(北大)

- 土木計画論の概念
 - 土木計画論ではその結論が十分意識的なものである限り、必ずしもそのための見通し、価値判断に**合理性の裏付けが不可欠なものではなく**、直感的要素が介入してもその本質的要件を損ねるわけではない
 - 現実的要請として、合意の不偏性を獲得するために、見通し、価値判断に高度の合理性が要求される
 - 価値判断に対して**社会的同意**の確保
 - 見通しに対して**論理性と科学性**とが要請されている
- 土木計画学の基盤としての文化研究
 - 土木計画学は情報システム工学であり、**学際研究**の最先端を行く学問である
 - 土木計画学は横断科学に位置するといえる

討議録より

- 対象物を対象とした**縦型**の学問と、現象を対象とした**横型**の学問が**網目状**に関連しながら、一つの分化総合という過程を繰り返しながら学問は発達していく。土木計画学はこのような発展過程の中にひとつの位置づけが与えられる
- 工学では**目標を議論する**ということではなく理論を立ててそれを**調査・実験**するということが行われる。その点で社会科学と工学とは共通点もあるが異なる点が多い。
- 大きなプロジェクトに直面すると**価値の分析**を行わずに対処することはもはや不可能になってきている。現場マインドの**希望**としては、**一手段の分析**と**その力と同じくらいの手立て**を**価値の分析**とが、**目的の設定**にそぐうことを求めたい。そうでなければ、土木計画論または土木計画学の有用性に大きな限界が生じる

おためごかし

- 【大辞林】
 - 表面はいかにも相手のためであるかのようにいつわって、実際は自分の利益をはかること。
- 【隠語辞典】
 - 当人の利益になるが如く云ひて説き、内実は自己の利益のみを計ること
 - 他人の利を謀るに托して実は自家の利を営むを言ふ。コカンは倒すの意味
- 【マックスブラック】
 - ある人物の考えや感情、態度について、ことに思わせぶりな言葉や行動を通して、誤解を招くような歪曲表現だが、嘘には至らないもの
- 【ハリー フランクファート】
 - 発言が自分自身についてある印象を伝えるよう意図している

おためごかしの活動

- 何かを伝えようとするふりはしているが、全くそのような活動をしていない
- 何らかの発言によって、相手の意見や態度を操ろうとしている
- 自分の話している内容が、真なのか偽なのかについて無関心になる

フランクファートによる批判

おためごかしの問題は、真偽についての無関心

真偽についての無関心は、最も害が大きい

真実 > ウソ > おためごかし